

看護師養成所における男子看護学生の学年別の体験 —学生の記述内容分析から—

元井 好美, 藤野 文代

キーワード：男子看護学生, 男性看護師, 体験, 経験

I. 諸言

平成28年衛生行政報告例の概況¹⁾によると, 就業看護師は平成26年に比べ5.8%増加している. そのうち, 男性看護師が看護師就業者総数の7.3%であり年々増加傾向にある. これは男女共同参画社会の構築における看護教育カリキュラムの改正が影響していると考えられる. しかし, 就業者の男女割合は92.7%が女性であり²⁾, 男性看護師が少数派であることは事実である. 看護は女性的職業と認識され, 男性看護師が性別違和感を体験するとの報告があり³⁾, この違和感は男子看護学生も抱くのではないかと推測される. そのため, 少数派ゆえの男子看護学生の体験を明らかにしたいと考えた.

男子看護学生を対象にした先行研究では, 母性看護学実習に関する文献が多く^{4) 5)}, その他, 看護師養成課程における男子大学生の体験や経験を明らかにした研究^{6) ~8)}は増えているが, 看護師養成所を対象に学年別分析をした研究は見当たらなかった. そこで, 看護師養成所在学中の男子看護学生の体験を明らかにすることは, 看護の専門性や男性役割を活かしながら学生に適した学習支援方法を検討するための基礎的資料になると考える.

本研究の目的は, 男子看護学生が感じていること, 体験していることを明らかにすることである.

II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的記述的研究
2. 研究対象者：A看護師養成所（3年課程全日制）在学中の1～3学年の男子看護学生19名
3. データ収集期間：平成29年9月～10月

4. データ収集方法：男子看護学生の体験について, 記述式質問紙法を実施した. 質問内容は①基本属性, ②学生生活で感じていること, ③印象深い体験, ④体験を重ねて学習に活かしていること, とした.

5. 分析方法：質的帰納的分析を行った.

まず, 自記式質問紙調査から個別分析を行い, 男子看護学生がどのようなことを感じ, 体験しているのかに関する内容をデータ範囲として学年毎に概要を整理した. 各学年のデータは言葉の意味を損なわないよう抽出し1次コードとした. さらに類似する内容をまとめ2次コード(以下コード)とした. 全体分析の中で抽象化を進め, 修正精練を繰り返し, サブカテゴリー, カテゴリーを導き出した. 分析過程において複数の研究者でデータと分析内容の照合を行い, その解釈が研究者間で一致するまで繰り返し吟味し, 真実性と妥当性の確保に努めた.

6. 用語の定義

体験：自分で実際に経験すること. (男子看護学生の感じていることや思いを含む)

経験：実際に見たり聞いたり行ったりすること. また, それによって得られた知識や技能.

7. 倫理的配慮

本研究対象者には研究依頼文を示し研究の趣旨を説明し, 自由意思参加であること, 評価等に一切の不利益を被らないことを説明した. また, 個人に関する資料はすべて匿名とし, 個人が特定されるような情報の記載や公表はしないことを説明し, 質問紙の提出箱への投函をもって対象者の同意とした.

Yoshimi Motoi, Fumiyo Fujino
横浜創英大学看護学部

III. 研究結果

1. 回答数と回収率

男子看護学生22名に配布し19名から回答を得た。回収率は86%で、すべてを有効回答とした。

2. 基本属性

対象者の平均年齢は25歳で、社会人率は62%であった(表1)。

表1 研究対象者の概要

全学年の概要		1学年	2学年	3学年	全体
	学年の人数	41名	38名	50名	129名
男子の人数	7名	6名	9名	22名	
男子率	17%	16%	18%	17%	
年齢幅(歳)	19~34	20~31	21~34	19~34	
対象者の概要		1学年	2学年	3学年	全体
	回答者数	7名	6名	6名	19名
	回収率	100%	100%	67%	86%
	平均年齢	26歳	24歳	25歳	25歳
	社会人経験者	5名	3名	4名	12名
	社会人率	71%	50%	66%	62%

3. 学年別男子看護学生の体験の概要

学年別男子看護学生の体験を整理し、以下、学年を【 】, 体験の要約を〔 〕, 具体的な内容を〈 〉で示す(表2)。

【1学年の体験】は〔女子はパワフルだと感じる〕中で、〈男子がいるとその場が和む〉など〔男子ならではの思い〕があった。また〔性差は感じない〕〔協同することが大切〕と考え、他学生の多様な経験は自分にもプラスになっていた。そして〔男子としての責任を感じ〕ながら、〈団結力が強い〉ことを励みにしていた。

【2学年の体験】は実習記録や学校行事等の企画運営が重なり、日々の課題や協同の場面に〔苦痛やストレスを感じる〕と捉えている一方、〔協同することが大事〕と感じていた。そして、〔授業は楽しい〕など、学ぶ楽しさや実習で得た体験から〔相手の立場になることが大切〕と考えられるようになり、配慮や思いやりにつながっていた。

【3学年の体験】は〈実習先で看護学生と見られず病院スタッフと間違えられる〉など、〔認知度の低さ〕を感じていた。また、〔男子の少人数を実感〕し、〈女子の中で自分の意見が言えない〉状況にあった。しかし〈少人数だからこそ男子同士の結束力は強い〉ことをプラスに捉え、女性多数の中で〔人間関係を大切にしている〕

ことがわかった。

4. 全学年における男子看護学生の体験

学年分析から全体分析を行った結果、41コード、10サブカテゴリー、4カテゴリーを生成した(表3)。

1) 男子の少人数を実感し苦痛やストレスを感じる

女性多数の学生生活の中で〈苦痛やストレスを感じる〉ことは多く、実習では男性看護師の〈認知度の低さを感じる〉など、複雑な思いを抱いていた。また、演習等では〔男子の少人数を実感する〕こともあり、〈女子の中で自分の意見が言いづらい〉と感じていた。

2) 男子としての特性を感じる

〈少人数だからこそ男子同士の結束力は強い〉と感じ、男子同士での協力が〔学生生活での楽しみ〕になっていた。また、〈男子がいるとその場が和む〉など、〔男子ならではの思い〕があった。

3) 人間関係を大切にする

〈女性多数の中で人間関係を大切にしている〉〈相手を知り、性格を理解して会話するという体験が実習に活かされている〉など、〔女子との関わりは大事〕と捉えていた。また、女子の積極性に共感し〔女子はパワフルだと感じる〕存在になっていた。

4) 相手の立場になり協同する

学生生活の中で〔性差は関係ない〕と感じており、〈演習で患者役や看護師役になり相手の思いがわかり実習に活かせる〉など、〔相手の立場になることが大切〕と捉えていた。そして、〈みんなで話し合うことは疑問が解消し実習の成果にもつながる〉〈同級生でお互いに切磋琢磨できる〉と〔協同する大切さ〕を感じていた。

IV. 考察

1) 学年別男子看護学生の体験

学年別に分析すると学生は日々成長していることがわかる。1学年では〈男子がいるとその場が和む〉と自らを肯定し、〔性差は感じない〕、男女〔協同することが大切〕と捉えている。これは入学間もない状況で体験の少なさが影響していると考えられる。2学年では学校行事のリーダー役割を担うなど、〔苦痛やストレスを感じる〕ことが増えている。一方で〔授業は楽しい〕と感じ、〔協同することが大事〕〔相手の立場になることが大切〕と捉えていた。これは実習で得た経験の積み重ねによるものと考えられる。3学年になると人との対応も積極的になる中で、これまでになかった〔認知度の低さを感じる〕ことが明らかになった。これは男子看護学生として見られ

表2 学年別男子看護学生の体験の概要

学年別	体験の要約	具体的な内容（一部抜粋）
1 学年の体験	女子はパワフルだと感じる	女子で子育てや社会人経験のある人は積極的だと感じる 女子は元気、パワフルだと感じる
	男子ならではの思い	男子がいるとその場が和む 力仕事の時は便利と言われ嬉しい
	性差は感じない	性別について感じることはない 男女変わらない接し方をしている 意見のくい違いがあっても男女関係なく話し合う
	協同することが大切	グループ課題や実習など、明るいつもろいで意見交換できている さまざまな経験をしているクラスメートがいて楽しいとともに、ためになることも多い
	男子としての責任を感じる	頼りにされ責任のかかることは男子が引き受けることが多い 団結力が強い
	苦痛やストレスを感じる	実習、学校行事、提出物、たくさんのことが重なりストレスになる 男子が少ないので気軽に話せないのがしんどい 女性が強い世の中で、男子は引き気味になる
2 学年の体験	協同することが大事	グループでの協調性が大事だと気づいた 同期生でお互いに切磋琢磨できる
	授業は楽しい	授業が進み解剖生理に関心をもてた 日々の課題があり忙しいが楽しめている
	相手の立場になることが大切	演習では羞恥心などの配慮に気が付くことができた 演習で患者役や看護師役になり、相手の立場がわかり実習に活かされた 人への思いやりや気づき、これが患者さんにも大切だとわかった
	認知度の低さを感じる	実習先で看護学生と見られず病院スタッフと間違えられる 男性看護師の認知度の低さを感じる
3 学年の体験	男子の少人数を実感	少人数だからこそ男子同士の結束力は強い 女子の中で自分の意見が言えない
	人間関係を大切にしている	女性多数の中で人間関係を大切にしている 女子は元気なので憧れの存在である 相手を知り、性格を理解して会話するという体験は実習に活かされている

ない複雑な思いがあることを示している。その中で人間関係を大切にし、他者をよく知り関わることは看護専門職業人としての自覚につながっていると考える。

以上のことから学生生活での体験を通して、協同する力や相手の立場になることを大切に考え行動していることが示唆された。

2) 全学年における男子看護学生の体験

対象者の平均年齢は25歳で、うち62%が社会人経験者であった。社会人経験者は自らの経験から自己効力感を高め、人との関係の再構築や問題対処能力が高いと考えられる。田村ら⁸⁾は男子大学生が女子との不平等を感じると報告しているが、本研究では苦痛やストレスはあるものの、不平等の表現はなかった。これは現役生で構成される大学生と比べ、対象が社会人率62%であったこ

とが影響していると推測される。また、緒方ら⁹⁾は看護業務の中で、男性看護師と女性看護師双方の困難を明らかにしているが、本研究では〔性差は関係ない〕と捉えていた。これは学生時代での臨床経験が少ないためと考えられるが、今回、男子看護学生の抱く複雑な思いが明らかになったことから、将来、看護師になった時に体験するかもしれない自己像をイメージしながら学生生活を送っていることが推測された。

今回の調査で男子看護学生の体験には、【男子の少人数を実感し苦痛やストレスを感じる】一方で、〈力仕事の時は任せられて嬉しい〉と〔男子ならではの思い〕もあり、【男子としての特性を感じる】ことが明らかになった。そして【人間関係を大切にすること】を考えながら学生生活を送り、思いやりや【相手の立場になり協同する】ことなど、様々な体験を通して日常的な気配りや実

表3 全学年における男子看護学生の体験

カテゴリー (4)	サブカテゴリー (10)	コード (41)
男子の少人数を 実感し苦痛や ストレスを感じる	苦痛やストレスを感じる	実習, 学校行事, 提出物, たくさんのことが重なりストレスになる
		クラスの協調性の差が大きいのでストレスを感じる
		男子が少ないので気軽に話せないのがしんどい
	認知度の低さを感じる	休み時間は一人が多く, 話したいと思う人がいない
		負担のかかる作業は男子がすることが多いので苦痛だ
		女子の中で一緒に学ぶのはしんどい
男子の少人数を実感する	女性が強い世の中で男子は引き気味になる	
	男子同士で盛り上がるとまわりの視線が気になる	
	女子と考え方に違いがあり, わかってもらえない	
男子としての 特性を感じる	学生生活での楽しみ	女子同士でグループがあるので入りにくい
		実習先で看護学生として見られず病院スタッフと間違えられる
		男性看護師の認知度の低さを感じる
	男子ならではの思い	女子の中で自分の意見が言いづらい
		男子1人に対して女子が3~4人というグループワークが常である
		少人数だからこそ男子同士の結束力は強い
人間関係を 大切にする	女子との関わりは大事	男子は実習中に可愛がられる
		名前をすぐに覚えてもらえる
		講師の先生の熱意により授業が楽しくなってきた
	女子はパワフルだと感じる	日々, 課題があり忙しいが男子同士で協力し楽しめている
		頼りにされることが多い
		男子がいるとその場が和む
相手の立場になり 協同する	性差は関係ない	力仕事の時は任せられて嬉しい
		女性多数の中で人間関係を大切にしている
		女子とのコミュニケーションが積極的にとれるようになった
	相手の立場になることが大切	女子は元気なので憧れの存在である
		相手を知り, 性格を理解して会話する体験が実習に活かされている
		女子で子育てや社会人経験のある人は積極的だと感じる
協同する大切さ	女子は元気, パワフルだと感じる	
	性別について感じることはない	
	学校生活半年もたてば男女の壁は感じなくなった	
協同する大切さ	相手の立場になることが大切	男女変わらない接し方をしている
		意見のくい違いがあっても男女関係なく話し合う
		実習の経験によりこの先も対象の気持ちに寄り添えると思った
	協同する大切さ	演習では羞恥心などの配慮に気が付くことができた
		演習で患者役や看護師役になり相手の思いがわかり実習に活かせる
		人への思いやりや気づき, これが患者さんにも大切だとわかった
協同する大切さ	みんなで話し合うことは疑問が解消し実習の成果にもつながる	
	グループでの協調性が大事だと気づいた	
	同期生でお互いに切磋琢磨できる	
協同する大切さ	協同する大切さ	実習など明るい雰囲気で見聞交換できている
		様々な経験をしているクラスメートがいて, ためになることも多い

習中の患者との関わりにつなげていたと考える。

以上のことより、仲間意識の高さやお互いを認め合うことは今後の実践の場につながっていくことと考える。看護の専門性が発揮され、男性看護師の必要性も高まっている現状においては、男女の隔たりなく不平等感のない学習環境の調整が重要であり、男子看護学生が孤立しないよう、様々な支援が必要であると考えます。

本研究では男子看護学生の体験についてデータを得たが、1施設で対象が限られ、社会人経験者が半数以上という特性のため、結果の一般化には限界がある。今後、複数の施設の男子看護学生を対象として調査を行うことや量的研究を併用していく必要がある。

V. 結語

看護師養成所における男子看護学生は複雑な思いや様々な体験を通して、身近にある実習につなげていくことを感じながら、協調性、思いやり、相手の立場になることなど、日常的な気配りを大切にしていた。学年別の結果では、高学年になるほど人間関係構築へとつながり、実習で得た経験の積み重ねは看護実践能力の向上に役立つものといえる。

引用文献

- 1) 平成28年衛生行政報告例(就業医療関係者)概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/16>
- 2) 日本看護協会出版会編：平成23年度看護関係統計資料集, 12-13, 2012.
- 3) 矢原隆行：看護教育の場におけるジェンダー構築、男子看護学生をめぐる状況, 看護教育, 42(1), 34-38, 2001.
- 4) 大森智美, 藤村博恵, 宍戸路佳, 他：母性看護学実習における男子看護学生の体験 実習による学びと変化, 母性衛生, 52(3), 224, 2011.
- 5) 日隈たまえ：男子看護学生の母性看護学実習前後における性役割観の変化, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 28, 138-145, 2003.
- 6) 市川裕美子, 佐藤真由美, 坂本弘子：男子看護学生が感じている学習上の困難の内容, 八戸短期大学研究紀要, 36, 77-85, 2013.
- 7) 飯高直也, 多喜田恵子：男子看護学生が大学生活で遭遇する困難な体験, 日本看護学会論文集精神看護, 41, 155-158, 2011.
- 8) 田村聡司, 飯野矢住代, 加悦美恵：男子看護学生の看護大学における適応の過程, 看護教育, 51(7), 586-587, 2010.
- 9) 緒方昭子, 内柱明子, 土屋八千代：新人男性看護師の経験—2年目新人看護師の語りから—, 南九州看護研究誌, 8(1), 33-39, 2010.